

サンパウロ国際映画祭 2005 公式コンペ・ノミネート作品
ベルリン・アジア・パシフィック映画祭 2005 公式コンペ・ノミネート作品
インド・ケララ国際映画祭 2003 公式コンペ・ノミネート作品
タイ・バンコック国際映画祭 2004 招待作品
ニューヨーク・Arkipelago 映画祭 2003 招待作品
長岡アジア映画祭 2004 招待作品・東京平和映画祭 2005 招待作品
沖縄伊江島映画祭招待作品・福岡アジア映画祭 2005 招待作品

日比 NPO 協働製作劇映画

「アボン・小さい家」

地球で生きるために

アボンとは、山岳民族の言葉で「小さい家」という意味です。

「アボン・小さい家」製作・上映委員会
NPOサルボン(東京)・NPOルボン - バギオ(フィリピン)
“Small Home” Production Exhibition Committee

「アボン・小さい家」は、地球上の自然的なものと人間的なもの、貧しさと豊かさ、寛容と不寛容などに晒された世界の縮図である。自然と共生して暮らすイゴロットの豊かな生活と、そこから町へ出た日系フィリピン人の家族の貧しさと哀しさ。その彼らの生活と家族の絆を優しい視線で包んで描きながら、映画は風刺のきいた寓話的な世界を見事に築き上げている。

映画評論家 村山匡一郎

バギオのカソリック・ビショップ推薦
ベンゲット州知事および 13 市町村知事推薦

HP: <http://www.ne.jp/asahi/small/home/>
協賛：国際交流基金 フェローシップ 1998
国際交流基金 映画助成 2000
National Committee of Culture and Arts 2002 映画助成
Philippine Information Agency 協同製作
Mowelfund Film Institute 協同製作

この脚本について

今の時点で私は自分のことをこの脚本「アボン・小さい家」の恩恵を受けた最初の間人だと思っています。この脚本を発展させるためにほんの短い間協力させてもらっただけなのだが、その短い間は私にとって自分の人生を考え直し、キリスト教徒として、女性として、自分の持つべき信念を新たに作る貴重な機会となりました。心の奥底から感じたこの喜びを、私は多くの人々と分かち合えたらと願っています。脚本執筆の過程で、この脚本の最初の作者である今泉光司氏は私とそのテーマを理解できるように忍耐強く導いてくれました。より重要なのは、その主題を自分のものとして私の属する社会の文脈におくことでした。幾度となく私は自分を恥じました。何故フィリピン人でない人が私の目を開かせてくれるまで、私は自分の国の美しさに気がつかなかったのだろう。

キリスト教の大聖年である 2000 年を前にして、我々はキリスト教が人間社会と自然に対してどのようなインパクトを持ってきたのかを見直す必要があります。そのもたらした多くの恩恵を喜ぶと同時に、我々はキリスト教の名の下になされてしまった多くの過ちも真摯に見つめなければなりません。

今こそ人間が造ってきたあらゆる制度を見直し考え直す時です。現代の環境破壊と人間破壊の危機にあって、われわれは人間以外の宇宙のすべてをただモノとして見てき我々の思考パターンは厳しい批判にさらされています。

今私たちはどのような子どもたちを育てているのだろうか？ 言うまでも無いことですが、今日の世界にあって家族と言うコンセプトは問い直され、また危機的な状態にあります。われわれの物質主義的な社会は母親たちを海外へ出稼ぎに追いやり、子どもたちが取り残されています。この「母なき」子どもたちはしばしば心理的・精神的な問題を抱え、それは社会の混乱に一層の拍車をかけることにもなっています。

メディアは人々に対して大きな力を持っています。それがこのコマーシャル社会の副作用なのです。私たちはそれに取って代わるべき新たなメディアが必要です 自分たちのため、そして子どもたちのために。この企画は人間の未来のために、私たちがコルディリエラ山岳地帯から始める草の根運動の側からの兆戦ともなるでしょう。多くの友人や知人たちが、この脚本を作り上げるためにその知恵と知識を提供してくれました。これは取って代わるべき新しいメディアにとっても、とても有望な支持の徴です。

我々は自分の心に、先住民の人々に、あらゆる生き物が宇宙全体の壮大な創造物の一部だという達観に耳を傾ける必要がある。いま必要とされているのは人間中心主義ではなく、キリスト教に根ざしながらもアニミズム的な姿勢です。どれだけ苦難が伴うかは分からないけれど、それでも我々はより良い生き方を選ぶことができる筈なのです。『アボン・小さい家』は、今どうしても必要な人間の変化に参加しようという誘いです。私自身をはじめ、多くの人々がよき知らせ（福音）を待っているのです。〔翻訳：藤原敏史〕

1999 年 4 月

クリステーナ S. アバン

脚本協働執筆者・キリスト教社会活動家・セントルイス大学神学主任教諭

はじめに

この映画の舞台となったフィリピン・ルソン島北部山岳地帯は第二次世界大戦末期に多くの旧日本帝国軍兵士と日系人、そしてフィリピン人が亡くなったところです。その山奥の桃源郷で、お伽噺のような日系山岳民族の現代の物語をフィルムに織りました。これはフィリピンの日系イゴロット山岳民族の家族の物語です。宗教と自然環境、貧困と真の豊かさ、地球上の多くの地域・田舎(非都市)の映画であり、地球で生きている人間の姿を私たちが再発見するコメディータッチの長編劇映画です。

私たちは学校や職場や家庭で、誰もがよく生きようと努力しています。しかし私が途上国の田舎に行くようになってから、「人間がよく生きる」とっていったいどういうことなんだろう」と疑問を持つようになりました。都市の中で生活している私たちにはとかく抽象的になりがちなそんな問いも、イゴロット(北ルソン山岳地帯の人々)の生活は私にその答えをはっきりと見せてくれました。人は地球で生きているのです。そんなことを発見できる映画が作れたらと思いました。

科学技術が発達し、様々なメディアが創出されてくる今、それに伴って私たちが真の豊かさを発見していく社会でありたいものです。様々な情報が便利に流通していく現代社会で、より独自の視点で良質な「作品」を創作していくのは作家の役割です。しかし様々なメディアが互いにしのぎを削るようになると、そこに流通する作品の作家性がどんどん薄れていくのはとても残念なことです。作品は社会を映すと同時に人々に影響していく時代の鏡です。時代に必要な映画作品を、企業や社会の人々と共に小さな体制で作りにあげることが、私の考える社会芸術映画です。

この映画は日比両国政府機関、地元ベンゲット州と 13 市町村、カソリックほかの宗教団体・学校・日系人会・マニラの映画産業、村の人々の協力を得て、日比 NPO のボランティア・スタッフが協働で自主製作・自主上映する映画の新しい試みです。

日比協同製作劇映画「アボン・小さい家」

製作監督 今泉光司

生きのびる主義

第三世界と言う呼び名は、東西冷戦時代に西側東側の間にある発展途上国のことを指して生まれた言葉です。フィリピンの映画作家キドラット・タヒミックは自作の映画の中で第三世界のことを「機械を使わずに人々が力を合わせて問題を解決する方法」だと言いました。資本主義だろうが共産主義だろうが利用できるものは何でも利用して足りないところは皆で力を合わせて生きてゆく、というのが第三世界の山の中で生きる人々の生活スタンスです。何でもいいから生きのびる主義です。今この生きのびる主義の視点から人間が生きると言うことや世界の有様を見てみると、まったく違った形と奥行きが見えてきてとってもおもしろいのです。

第三世界の生きのびる主義の人々にとっては、古いものも新しいものも同列に並んでいます。狩猟採集時代の様なライフスタイルから、政治的にも宗教的にも植民地政策の影響を受け大国の利害に巻き込まれて行った時代の歴史的産物や、現代のハイテクを駆使した最先端のライフスタイルまで、様々なものが混じり合って生活の中に同列に並んでいるのです。そこには人類がこれまで作り上げてきた道具や価値観の歴史博物館のような趣があって、新しい鏡で今まで見たことのない本当の世界の有様を見ているような新鮮な発見があります。経済大国のお金主義(環境問題でも家族の問題でも経済力さえあれば解決出来るとする主義)が益々力強くそんな山奥にまで影響を与えようとしている現在、彼らにとって、すべてを巻き込もうとするその大波をかわして生き続けるには、この第三世界の生きのびる主義(経済力・お金がなくなっても問題解決出来る主義)しかありません。

地球環境問題とはいったい何の問題なのでしょう。地球や人類滅亡の危機と叫ばれてもう久しくたちました。人間がこの地球で生きるとはどういう事なのでしょう。人間は何ひとつ自分で作り出すことはできません。地球の自然が作った物を利用しているにすぎないのです。それに気が付くまでにはもう少し森がなくなって食糧不足や薬害、石油不足や天災人災が増えて来るのを待たなければならないのでしょうか。自然と共に生きる豊かな生活って言うのはこういう事だったのです。

様々な宗教が林立するフィリピン北部山岳地帯。この映画はそこで生きている未だ知られざる日系フィリピン人の家族サバイバル映画です。派手なアクションシーンも豪華なセットもないけれども、思いっきり議論的になる問題百出の内容を盛り込んで、豊ボケした私たちの頭をシェイクしつつ、もうひとつの文明のあり方を提示する。このまったく新しい低予算シリアス・コメディ映画を第三世界の山の中から世界へ向けて発信する、それがこの映画「アボン・小さい家」です。

今泉光司

少数民族の文化から発信する新しい映画の試み

この映画は発展途上国の片田舎、フィリピン・ルソン島北部山岳地帯に生きる山岳民族が、中央から発信される商業映像〔映画館の映画〕と同じ映画媒体を通して、自分たちの民族文化の価値を再発見する「地方主義映画」の挑戦として企画製作されました。

世界 191 カ国のうちのほとんどが発展途上国といわれる国々です。その国々の非都市圏、産業のない地方に住む人々の人口は莫大なものがあります。毎日多くの人々が仕事を求めて町や外国に流れて行き、都市のスラムはますます巨大化しています。同時に地方の自然環境も悪化の一途をたどっています。自然風土と共存する地方文化的な生活スタイルは、いつしか自然から農作物や換金資源をむさばる自然破壊的な貨幣経済の生活スタイルに変わりました。自然崇拜や精霊信仰、独自の民族文化の気質や習俗は失われてしまい、誰もが都市的なライフスタイルに憧れています。それは映像メディアの強い影響があると思われます。山奥の田舎でも人々は電気を引いた家へ行き、商業 TV 番組や海賊版 DVD の映画をまるで映画館のように長時間見続けています。町にある映画館は高級な娯楽です。それらの映像は先進国都市の消費的ライフスタイルを優雅に魅惑的に映し、途上国の田舎や部族の生活をいつも悔めに描きます。その影響力はとても強く、人々は自分たち民族独自の生活スタイルを卑下しがちで、常に都市的な生活スタイルに憧れるようになってしまいました。今では世界中の途上国の若者がアメリカ人の生活に憧れています。これは人間文化の多様性の危機かもしれません。残念ながら途上国の地方には、自民族の伝統的生活や習俗の「美」を人々に気付かせてくれる映像メディア、映画作品などありません。今の時代はいくら山奥でも映像メディアの影響力は強烈で、メディアに映らないものは存在しないものにもなりかねません。現在途上国の自然環境は急激に悪化しつつあります。急速な近代化は人々の生活と自然環境に様々な弊害を及ぼしています。私たちは映画メディアを通して、風土に根づいた家屋や生活の「美」を人々に再発見してもらうことが、継続可能な地方独自の生活スタイルを濟世することに繋がると考えています。

またこの映画はフィリピンのハボンと呼ばれる日系 2 世、3 世、4 世についての映画でもあります。約 100 年前に多くの日本人が米軍に雇われて山岳道路建設に従事し、その後バギオの町は大きな日本人町になりました。しかし旧日本帝国軍が戦争を起こし、日系人たちは旧日本軍とアメリカ軍、フィリピン反日ゲリラ軍の狭間でひどい仕打ちを受けました。現在この多く子孫が日本に出稼ぎに来ているにもかかわらず、ほとんどの日本人は日系人どころかフィリピン戦のことすらよく知りません。この映画が日本の人々に、アジア近代史に興味を持つ良い機会になることを願います。

このプロジェクトは 1996 年に調査を初め、バギオのセントルイス大学カトリック神学主任教諭であり社会活動家のクリスティーナ・セグナケンさんと協働し、7 年の歳月をかけて 2003 年に完成した映画です。フィリピンの映画業界、日比両国政府と NPO のボランティア、教会・自治体・学校が協力して製作・上映された劇映画「アボン・小さい家」は新しい社会芸術映画のあり方を模索しています。

皆様と共に有意義な映画鑑賞を創造すること、それは新しい映画芸術の可能性を広げていくと共に、私たちがより良い生き方を模索していく文化再生の活動につながると信じています。

「アボン・小さい家」フィリピンでの公開状況と 今後の展開

この映画はフィリピン・ルソン島北部山岳地帯の地方文化再生とそれによる環境保全と家族再生、生活改善のためのプロジェクトとして日比協働で自主制作されました。1996年1月から調査、シナリオ・ハンテイングが開始され、オリジナルストーリーに2年、シナリオ完成に2年、準備と撮影に1年半、編集仕上げに1年半が費やされ、国際交流基金フェローシップ、同映画助成、フィリピン芸術文化評議会映画助成からの援助と、フィリピン情報省映画局、マニラにあるモエルファンド映画学校からの協力を得て、35mm英語字幕付きプリントが2003年2月に完成しました。

2月16日にマニラのローカル映画祭でプレミア上映され、2月28日から3月5日まで地元バギオの劇場で朝8時半のみのモーニングショウが上映されました。朝8時半にもかかわらず平均400人以上、6日間合計約2,500人の観客を集め大きな話題となりました。

地元バギオ市の自治体、ベンゲット州のカソリック・ビショップを始め各宗教団体、私立国公立大学・高校の推薦を得て8月中旬にバギオの商業映画館で一般公開し、2週間連日ほぼ満員の観客を集めました。9月のバギオ市のフェスティバルの公式プログラムにも加えられ、10月のバギオアートフェスティバルでも上映されました。その後ベンゲット州の協力を得て13市町村の学校・教会及びコミュニティーを巡回上映しています。約3ヶ月間上映し、2004年11月の時点で4万256人が映画を鑑賞しました。

現在は製作費を回収するために日本で上映活動を行っていますが、2006年度からは山岳地帯5つの州を3年以上かけて巡回上映する予定です。山岳地帯では現金を払えない人もいますが、村人からはお米や芋、野菜や果物、鶏などが持ち込まれ、上映会は多くの人々でにぎわいます。サルボン現地NPOと協働で映画の巡回上映と共に、食を中心にした田舎の文化再生プロジェクトを立ち上げていく予定です。

シノプシス（梗概）

ラモット（ハボン）の妻は海外出稼ぎに行こうとするが偽パスポートが見つかって収監され、出稼ぎ資金の借金を抱えて路頭に迷う父子。娘たちはほうきを売りながら様々な教会で母の帰りを祈る。しかし不法占拠していた家はつぶされ、仕方なく祖父母の住む田舎に帰るとそこは自然豊かな桃源郷だった。

シノプシス（梗概）

フィリピン北部山岳地帯の町バギオ。乗り合いジープの運転手をする日系3世のラモット・通称ハボン（日系混血人）は妻と子供三人と一緒に無断居住者地区で暮らしている。家政婦をしている妻イザベルは子どもたちをおいて外国に出稼ぎに旅立つ。二人の娘ケユ(10)、ピリット(8)と息子ノップノップ(5)は父の故郷の山奥、北ルボン村に送られ母をマニラに送りに行った父を待っている。しかし父ラモットはなかなか迎えに来てくれない。

やさしい祖父と日系二世の祖母は母屋の横に小さな家を造っていた。明け方森の木を切るために精霊たちに祈りを捧げる祖父母と村人たち。田舎の生活に馴染めず母を恋しがる子供たちを山の幸で慰める祖父母。草葎き家の周りには家畜と供に様々な野菜や果物が茂っている。村には老人たちと様々な経験をして帰って来た人たちが朝日や夕日を愛で、音楽を奏でたり本を読んだり、自然の恵みから食べ物を自給して楽しく暮らしている。ある日村の娘レタが恋人ジョナスを連れてこっそり実家を訪ねて来るが長老たちは早々と聞きつけて集まっている。海岸地帯の魚商の息子ジョナスは宗教や部族の違いを越えて自然とともに暮らす村人たちの生活に新しい生き方を発見する。アメリカで働いて神経を病んで帰ってきたホアンは自然療法家の叔父の家にやってくる。山ほど抱えてきた電気製品は村の暮らしにそぐわない。山の村には教会も電気も道路もない代わりに自然の恵みに養われて生きる人々の生活がある。植林キャンペーンの村芝居の晩、祖父はラモットからの手紙を受け取りイザベルがパスポート偽造で逮捕された事を知る。

翌朝祖父母は孫たちとバギオに行く。するとラモットは夜の町で借金を抱えて途方にくれていた。祖父とラモットは金を稼ぐ算段をするがろくな考えが浮かばない。住宅地に家を買う夢は消え去った。町は西暦2000年のパレードで賑わっている。祖母は戦争で生き別れた日本人の父を共同墓地に参り、祖父と山の村に帰っていく。ジョナスは恋人レタを実家に招くが家族は山岳部族の娘を受け入れようとしない。しかしジョナスの決意は固い。

ケユとピリットは近所のイスラム教徒の奥さんに仕事をもらい町で小銭を稼ぎ始める。日曜日には様々な教会でほうきを売りながら母の帰りを祈る。しかしある日無断居住者の強制立ち退きで家族の家は潰されてしまう。行き場を失ったラモットは村に帰る決意をする。久しぶりに村に帰ったラモットは故郷の自然と豊かな田舎の生活を再発見する。川は流れ、鳥がさえずり、果物が実る。雷雲が雨を降らせ、地球の生き物たちが命を分かち合う。温泉の湧く村で祖父の姉の死を見届けて帰った子供たちは、村に帰っていた母親イザベルと再会する。

ラモットは村人たちが賑やかに伝統儀式的踊りを踊るのを見ながら、家族が生きていく

場所を再確認する。そしてラモットは借金を返すために日本に出稼ぎに行く申請をしに町に行く。

フィリピンの歴史的背景

フィリピンと呼ばれた島々は東南アジアの東の端にある七千百あまりの島々から成り立っています。台湾や日本の島々と共に環太平洋造山帯に属し、島々には多くの山岳地帯があり、かつては豊かな原生林に覆われていました。地形は様々な地質によって変化に富み、活断層が島々を走り火山が多く地震も多発します。山岳地帯の気候は涼しいですが一般的に高温多湿で、乾期には水不足、雨期には多くの台風が発生します。

16世紀初頭、マレー半島を經由して南から中部ルソンにかけてイスラム教の波が押し寄せ、かつて土着の自然崇拝の信仰を持っていた人々は、アラブ・中東・南アジア諸国文化の影響を受けました。1521年そこへ世界一周を企てたマジェランの艦隊がマクタン島と呼ばれる小さな島に上陸しました。彼はスペイン王の名でその島の内乱に介入して戦死します。しかし時のスペイン国王フィリップは続々と僧侶と兵隊を送り込んで島々を制圧し、イスラム教を排してカトリック教に改宗させました。そして人々にその宗教的な生活文化とスペイン国籍を課し、その島々をスペイン国王の名を取ってフィリピンと名付けました。フィリピンと名付けられた島々は333年間スペインの植民地とされ、その間にローマカトリックの生活習慣と権威主義の階級制社会を深く根付かせました。高温湿潤な東南アジアの風土に生まれた島々独自の文化は、ヨーロッパの乾いた風土に培われたラテン文化に改変されてしまいました。

1898年フィリピン諸島は二千万ドルで米国に譲渡されてしまいます。当初独立を目指した革命軍は激しく抵抗しましたが、その後米国の「民主的植民地政策」によって一応固有の政府を与えられます。米国はフィリピン諸島を接収して以来新しいキリスト教、プロテスタントの各宗派を学校制度を通して広めていきました。またマスメディアを利用した合理的な商業システムを通して、人々に商業文化を浸透させ、フィリピンは大衆消費社会になって行きます。そして人々の自然から生まれた独自の信仰と風土に根付いた知恵や生活習慣は、先進国と同様自然や環境を顧みない人間中心主義と商業文化に変わって行きました。

第二次世界大戦中フィリピンは旧日本軍に侵略され日米の激戦地になってしまいます。日本の敗戦後

1946年7月4日にフィリピンは米国から独立を与えられます。しかしそれは米国の独立記念日と同じ日で、憲法も米国のもののコピーでした。クラーク、スービック他の米軍基地は存続し、独立は与えられても米国寄りの政治体制は続いていました。1972年、その中でマルコス大統領は全国に戒厳令を敷き、国民の自由を奪いました。独裁政治は65年以来20年間続けられ、1986年に民衆が蜂起してマルコス大統領はハワイへ亡命します。

1986年の民衆蜂起以来フィリピンは独自の道を歩み始めました。しかし多額の借金を抱えている上に天災が相次ぎ、経済的自立は容易ではありません。それに加えてキリスト教よりの政権に反対するイスラム教反政府軍や山岳部の反乱軍との内乱が続きました。様々な宗教が林立し抽象論が飛び交う。経済問題、貧困、犯罪、汚職、政治家の退廃、それに地震、火山噴火、台風、洪水、土砂崩れ、水不足に停電。そんな

な中、1990年にフィリピンはピナツボ火山の噴火に助けられながらも米軍の軍事基地を全て撤退させました。そして世界中に出稼ぎ労働者を送り出しながらも、現在自力の歩みを続けています。

日系人の歴史

20世紀初頭、スペインからフィリピンを買収した米国フィリピン行政委員会は、気候の涼しいルソン島北部山岳地帯の入り口バギオに避暑施設建設の計画をしていました。山岳地帯を開発するには何としても山を貫く舗装道路の建設が必要でした。しかし急峻な谷間を縫っての工事は容易ではなく、雨期の大雨も工事に多くの被害をもたらし、労働者確保に苦心していました。三人目の工事責任者ケノン少佐は各国から多数の外国人労働者を呼び寄せ、物量作戦を敷き、1905年に海拔1500mの町バギオに至るベンゲット道路は多くの犠牲者を出して開通しました。

この時多くの日本人がフィリピンに出稼ぎに渡り、ベンゲット道路完成後にイゴロット（山岳民族の総称）の女性と結婚し、バギオは大きな日本人町になりました。中心街のセッションロードは敗戦まで日本人の商店で占められていました。しかし第二次世界大戦中フィリピンは日米戦の激戦地になります。戦争末期、敗走してきた山下大将率いる旧日本軍兵士たちと敗走を余儀なくされた日系民間人たちは、日本軍最後の砦であったバギオを後にしてコルディエラ山岳地帯へと散って行きました。

そして敗戦後辛くも生き残った人々の中で、日本人は本土帰国を許され、フィリピン人の妻と日系の子孫たち（ハポンと呼ばれている）はその地に取り残されました。その後1975年に日本から来たフランシスコ会のシスター海野が、ひとりひとりの日系人を捜し訪ね勇気付けに行くまで、日系人たちは日本の名前を隠し差別に堪え忍びながら山奥でひっそりと暮らしていました。今でもバギオ周辺とコルディエラの山の中には多くの日系の子孫が暮らしています。現在バギオには、映画と同じ名前のアボン（小さい家）という日系人会があります。彼らは今自分たちのことをジャパニーズ・イゴロット（日系山岳民）と呼んでいます。

現在日本で就労ビザが下りるのは日系人か芸能人（ダンサー等）に限られています。公式に日系人として認められるには、フィリピンでの出生証明書と祖父か曾祖父である一世の日本の戸籍が必要です。しかし1世の日本の戸籍を探すのは難しく、また出生証明書も米軍の爆撃により消失し、多くの日系人が公式には日系人と認められていません。今もボランティアによる戸籍探しは続けられています。

映画 「アボン・小さい家」

製作母体 比日協同製作映画「小さい家」製作上映委員会 (バギオ市)
特定非営利活動法人サルボン、NPO LUBONG-Baguio Inc.

形態 35mm・16mm劇場映画(16mmfilm撮影)

上映時間 130分、DVD日本語字幕版111分

言語 英語と一部イゴロット語(タガログ語、カンカナイ語、イロカノ語)
日本語字幕版/英語字幕版

製作・監督 : 今泉光司

コ-ディネ-タ- : KIDLAT TAHIMIK, NICK DEOCAMPO

プロデュ-サ-(製作上映委員会チーフ) : CRISTINA SEGNAKEN

プロダクションデスク : 須田ミチル、NORA DULAY, 若林昌広

プロダクションスタッフ : SANTOS BAYUCCA, RUBEN QUILAN, ROLAND SEGNAKEN,
野口隆司、JANE NGIWAS, JUDEEH ANN NIERVA

キャスト JOEL TORRE、KIDLAT TAHIMIK、JOEY AYALA、LUI MANANSALA、NANDO SAN PEDRO、ERIC
SALVADOR、ARNEL BANASAN. 他マニラ・バギオのアーティスト、
コルディリエラの日系人、日系人子役、山岳民の村人

撮影 : BOY・YNIGUEZ 録音 : DENNIS・EMPALMADO

音楽 : JOEY・AYALA 照明 : JESSIE・TILLADO

美術 : YEYE・CALDERON

劇部撮影日数 : 劇部33日間(1ヶ月半) 実景6ヶ月

撮影期間 : 2001年4月17日~6月4日、 実景班 ~12月

映画の経緯 1996年バギオで映画のための調査を始める。
1997年6月 ストーリーと企画案を完成。
1999年1月バギオにてシナリオデベロップメント会議を始める。
9月にシナリオ第一校完成。
2001年4月17日クランクイン~6月4日クランクアップ
8月~フィリピン情報省 映画局にてポストプロ作業開始
2003年8月21日 バギオ市内センターモール、シルバーシアターで一般公開

後援助成 : 国際交流基金映画助成、国際交流基金フェロシップ
フィリピン文化芸術評議会(NCCA)映画助成.

協同製作 : フィリピン情報省映画局(PIA), モウエルファンド映画学校(MFI)

支援協賛 : トヨタ自動車フィリピン、コダック、フィリピン航空
ダンワトランコ、ナルダス、アボン北ルソン日系人会
ホームページ : <http://www.ne.jp/asahi/small/home/>

映画「アボン・小さい家」

製作母胎 比日協同製作映画「アボン・小さい家」製作・上映委員会
LUBONG BAGUIO INC (フィリピン)
特定非営利活動法人 サルボン (日本)

形態 16mm・35mm 劇映画 ビスタサイズ仕様 (スタンダード)

上映時間 130分、DVD 日本語字幕版 111分

言語 フィリピン英語 75%、タガログ及びローカル語 25%
日本語字幕版・英語字幕版

製作 CRISTINA SEGNAKEN (LUBONG BAGUIO INC.)
今泉 光司 (NPO サルボン)

協同製作 PHILIPPINE INFORMATION AGENCY
<Committee スタッフ>

Bureau Chief	Cristina Segnaken
Director	今泉光司
Scenario	今泉光司・Cristina Segnaken
Coordinators	Kidlat Tahimik, Nick Deocampo
Managers	若林昌広, Jane Ngiwas, Judeeh Ann Nierva
Desk	須田ミチル, Nora Dulay
Committee Staff	Ruben Quilan, Roland Segnaken, Santos Bayucca, 佐藤理穂、野口隆志、松島夕佳、山本康之、菅田恭一
応援団長	川上玲子

< Actors >:

Joel Torre, Lui Manansala Nando San Pedro, Banaue Miclat Maureen Gomez Kidlat Tahimik, Hazel Micli-ing, Nina Corpuz, Handiong Kapuno, Connie Chua, Eric Salvador, Nanding Joseph, Joey Ayala, Ermie Concepcion, Alette Dela Cruz, Ama Quiambao, Mauricio Domogan, Rene Aquitania, Kawayan de Guia, Raffy & Jocelyn Kapuno, Karlo Altomonte, Wilson Capuyan, Domingo Landicho, Carmen Del Rosairo, Lopez Nauyac, Marichu Carino, Franco Bawang, Gloria Sabado, Arnel Banasan, etc.

< Shooting Staff >

Cinematographer:-Boy Yniguez, Gaffer-Jess Tillado, Crew-Cine Force Sound Recordist-Dennis Empalmado, Art Designer-Wilfredo Yeye Calderon, Assistant Director-Ada Bautista, Production Manager- Paolo Villaluna,

< Post Production Staff >

Music Composer-Joey Ayala, Editor-Koji Imaizumi, Animation-Ellen Ramos, Sound Mixer-Arlen Roxas, Recordists-Jr. Abellana, Neil Getes, Song-Sendon Laboratory Supervisor-Roy Sanchez,

Color Grading-Ramir Guano, Post Production-Philippine Information Agency, Laboratory-LVN,
PIA

今泉 光司

Koji Imaizumi

1959年 東京都台東区生まれ
日本大学芸術学部映画学科卒業
シナリオ作家協会シナリオ講座終了
UCLA 映画公開講座 2 コース終了

フリーランス脚本・演出家として多数のビデオ・フィルム作品を制作した後、
映画監督小栗康平に 1995 年までの 9 年間助監督として師事
フィリピン・バギオのドキュメンタリー映画監督キドラット・タヒミックの
映画制作に参加

1996年~ フィリピン、バギオ市に住み、日比協同製作映画「アボン・小さい家」の調査・
シナリオハンティングを開始。

1998年 国際交流基金フェローシップ・
2000年 国際交流基金映画助成
2002年 フィリピン芸術文化評議会映画助成

フィルモグラフィ

1998年 ドキュメンタリー-自然農法・福岡正信「地球で生きるために」
Betacom 61min
2000年 音楽ドキュメンタリー-「梅津和時・HOBO サックス・カルテット、
モロッコへ行く」 DVCAM 93mins
2003年 第一回映画作品「アボン・小さい家」35mm・16mm 130分劇映画
2003年2月 ドキュメンタリー「画家 市村修・EL SUR」DVCAM 87mins

フィリピンの下宿先： C/O Mrs. Norma Quilan (日系人ヒガシ様方)
No.16, Block3, East Quirino Hill, Baguio City、Benguet
2600 Philippines

日本の住所：特定非営利活動法人サルボン

〒111-0041 東京都台東区元浅草 4-8-5 Tel & Fax 03-3843-0877

企画の動機

近頃は我が家の年代物のテレビでも衛星放送を受信して世界のニュースやドキュメンタリーを見ることが出来るようになりました。それを毎日眺めていると、世界には気候風土の違う様々な地域があり、いろいろな民族が暮らしているのがわかります。しかし世界中の様々な文化・風習を持った人々が、おんなじ価値観に向かって同質化しているように思えるのです。今世界には大きな予算をかけた宇宙開発があり、バブル時代の日本を思わせる様な急成長をしている途上国の都市があり、宗教対立だか利害対立だかわからない戦争があります。そして同時に環境破壊から引き起こされる様々な問題が地球上の至る所で増え続けています。世界の人々が同じ価値観を持つことによって同質の問題をも共有すると言う意味では良いことかも知れません。しかし世界中が消費経済を発達させて、益々近代化と合理化を進めて行けば行く程、抱える問題も加速度を益して増え続けて行くと言う構図にはぞろぞろ怖いものがあります。

石油資源が来世紀中には底をつくと言われていています。エネルギー問題と原子力廃棄物、人口爆発と食糧問題、砂漠化と貧困、宗教と民族の争い、環境汚染と人体の影響、開発による自然破壊と災害、動植物や人間の新種の病気、そして汚職と人々の退廃、倫理観の低下と若者のデカダンス。「地球環境の危機」や「人類生存の危機」などと言われるようになってもう随分とたちました。以前のように科学技術による人類の明るい未来について語るのには難しくなっています。それはマスコミや政治家が科学やテクノロジーの可能性を語っても、若者たちはその矛盾に気づき始めているからです。資源や環境問題の弥縫策をいくら打ち出しても、21世紀に人口が百億を越えると言われていている私たち人類の生き方は、いずれは考え直さなければならぬ時が来るでしょう。

ずいぶん前から多くの文学や漫画、映画やアニメーション、コンピューターゲームなどが、退廃化した社会や人間のデカダンスを当たり前の表現として描くようになりました。デカダンスは人間にとって最も甘く危険な「最後の魅惑」だったのです。それがメディアの日常的な表現になってしまっただけでは魅惑どころではありません。大人はもはや若者に対して語るべき言葉を持っていません。資源や環境の問題も深刻です。しかし若者が将来に希望を持っていないとしたら、その方がよほど深刻ではないでしょうか。世界の終わりのイメージや退廃的でロマンチックな物語もかつては挑発的で魅力的でした。しかしもう絶望的なイメージは飽きました。そろそろ未来に対して前向きなイメージが見たいのです。それを強く望んでいるのは、希望を持ってなくなっている子供たちや、退廃的になっている若者たちではないでしょうか。今必要なのは、きれい事をいうのではなく、現実の世界や人間の生き方をもう一度肯定的に確認していく様な物語です。人間はそう簡単には死滅しません。人間は世界がどんな状態になっても生きて行きます。たとえ仮に石油資源がなくなったとしても、私たちは生きて行きます。仮にエネルギー資源を全て使い果たしたとしても、社会は存続して人間は生きて行くのです。地球に太陽の光が降り注ぎ、空気と水と植物＝食物があれば人間は生きて行け

るのです。電気も車もテレビもコンビニがなくても人間は生きて行きます。すべてを失ったって、地球の自然さえあれば人間は生きて行くのです。事実発展途上国ではそうした状況をもろともせず遅く生きている人々がたくさんいます。そう思ってみれば、日本の若者たちも未来に対して、人生に対してもっと前向きになることが出来るのではないのでしょうか。そして大切なことは人々が死ぬまで安心して楽しく生きて行かなければなりません。さて、それには一体どうしたら良いのでしょうか？

人間は考え次第です。これは新しい価値観 = 文明の探求です。その考え方の大本は、人間は宗教や民族に関わりなく誰もが、「地球に住んでいる」と言う事です。地球環境は人間にとって、絶対必要条件です。人間は地球環境を乱すことなく生きると言う考えが第一義として先行しなければなりません。いつも地球の自然を観察し、感じ、学び、そのあり方に沿って生きようとする生き方に人間の尊さを見いださなくてはなりません。この新しい考え方 = 価値観から、民族や宗教を越えた新しい倫理観が生まれてくるでしょう。

私たちは今までこの地球でどのように生きてきたのでしょうか。そしてこれから私たちはどう生きて行くべきなのでしょう。この映画を通して、もう一度地球と言う自然の中で生きている人間の生き方を見つめ直してみたいと思います。私たちがより良く生きる事をあきらめないために。

今泉 光司

解説

映画「アボン・小さい家」は現代のおとぎ話のような、フィリピンの山奥の楽園に住む山岳部族の家族の物語を静かに描いた映画です。舞台はハボン（日本人）と呼ばれるラモット家族の住む山岳地帯の町バギオから始まり、祖父母の住む山奥の北ルボン村に移っていきます。物語は町の貧しい生活から始まり、ラモットの妻が3人の子供を置いて海外出稼ぎに出発し、全編通して子供たちは母を求めます。

バギオ市は標高1500m、多くの学校と教会のあるルソン島北部の山の町です。バギオに通じる道路ケノンロードが1905年にアメリカ軍によって建設され、以来バギオは日本から来た出稼ぎ労働者が定住した**日本人町**として栄えました。しかし太平洋戦争は彼らの幸福な生活を引き裂き、戦後1975年まで日系人は差別といじめから隠れて山でひっそりと暮らしていました。現在も多くの日系人が山岳地帯で暮らしています。劇中の祖母はバギオで生まれ育った**日系人2世**です。

現在日本で就労ビザが下りるのは日系人と芸能人に限られます。公式に日系人と認められるには日本人の子孫としての出生証明書と1世の日本戸籍が必要です。しかし多くの日系人は名前も定かではない1世の日本戸籍を探しています。

イゴロットは山岳部族の総称です。イゴロット族は長い植民地時代も入植者たちに征服されずに独自の文化を守り続けてきました。しかし低地民からは首狩族の末裔として蔑視されてもいます。今日ほとんどのイゴロット族はクリスチャンですが、先祖崇拜と自然信仰の

独自の文化をも同時に持ち続けています。昨今このアニミズムと信仰は環境保護主義者たちの注目を集めています。

村人たちが種を混ぜた粘土を丸めて蒔いているのは、マグサイサイ受賞者の自然農法家・福岡正信さんの粘土団子です。自然農法は自然と共に自給自足の新しい生活スタイルを標榜する究極の農法です。自然のサイクルに沿った新しい砂漠緑化の方法としても注目を集めています。

イフガオ族は木彫工芸で知られる部族です。苗木に水をやる俳優は実生活でも植林プロジェクトに取り組んでいるイフガオ族木彫り職人のリーダーです。

現在フィリピンには海外に出稼ぎに行った母親に取り残された孤独な子供たちがたくさんいます。幼い子供にとって母親との関係は、世界との信頼関係を築いていく基礎になります。現在若い母親の海外出稼ぎは様々な家庭不和の原因になっています。

村人たちの生活をサポートしているのはNGO ワーカーたちです。彼女たちはしばしば日本のNGOからサポートされています。ラモットの従妹レタは山で生きる村の女性たちを支援するNGOで働いています。

雨が降った翌日は森のきのこが出ます。そしてさまざまな生き物たちが働き始めます。その中で森の変形菌(粘菌)は、あるときは動物のようで、あるときは植物のような、生物学のどの分類にも当てはまらない議論百出の生物です。日本では南方熊楠が研究していたことで知られています。この地球には人間がよくわかっていない物事がまだまだたくさんあります。

劇中おばあさんは「ナマオエツア=恩を借ります」とよく言います。カンカナイ語には「ありがとう」に相当する言葉がありません。太古の時代から人間は自然や神の恵みにさまざまな形で感謝の念を表してきました。これは自然の恵みに対してお返しをして貸し借りのバランス感覚を保とうとする行為だといえます。人類は今、地球の恵みに対してこのバランス感覚を失いかけているのではないのでしょうか。地球で生き延びていくために、私たちはこの感覚を呼び戻さなくてはならないのでしょうか。

人間の一生とは何なのでしょう？人がよく生きるとはどういうことなのでしょう。母親の分身としてその体内からこの世に生まれ、自然がつくる様々な生き物を糧として育ち、やがて死んで地球に帰っていくのが人間です。この映画はそんな姿を再発見する映画です。